

秋山かおり著

『ハワイ日系人の強制収容史—太平洋戦争と抑留所の変遷』(彩流社、2020年) 尾上貴行 Takayuki Onoue

おやさと研究所講師

ハワイは、海外旅行先として人気が高く、なじみのある人も少なくないだろう。しかし、日本とハワイの関係史や日系人戦時強制収容について知っている人はさほど多くはないかもしれない。戦時中のアメリカ本土における約12万人におよぶ日系人強制収容については、これまでに膨大な量の研究が行われてきている。一方、家族を合わせても3,000人以下の強制収容にとどまったハワイにおいては、アメリカ本土と比べてその研究は多いとはいえ、まだ不明な点も多い。しかし、近年この状況に変化が見られ、ハワイにおける日系人強制収容についての研究は大きな進展をみせている。これまで不明だったホノウリウリ抑留所の所在地が2003年に特定された。2015年2月にはバラク・オバマ大統領(当時)によってその抑留所跡が国定史跡(National Monument)に認定され、昨年3月には国立史跡(National Historic Site)へ昇格した。またハワイ日本文化センターが、抑留体験者の聞き取り調査を実施し、博物館展示「楽園を覆う暗雲—ハワイの抑留者物語」を開催するなど、一般の人々の関心も寄せられるようになってきている。

本書はまさにこのような機運の中で生み出された研究書であり、ハワイ日系人強制収容の歴史を包括的に分析している。著者の秋山かおり氏は、ハワイ大学マノア校大学院アメリカ研究学部博物館学履修プログラムを修了したあと、ハワイのビショップ博物館やハワイ日本文化センターで勤務した経歴を持つ。本書では、ハワイでの実地調査や新たに発掘された新資料などに基づき、これまで不明な部分が多いとされてきたハワイの強制収容政策について、その開始から終焉に至るまでを明らかにしている。その目的は、「太平洋戦争下のアメリカ合衆国ハワイ準州(当時)に注目し、日系人強制収容の政策が及ぼした抑留対象者の選定と抑留所機能の変遷を追いながら、この変遷による諸条件がいかに抑留された人びとの体験を形成したのかを踏まえて、ハワイ日系人強制収容の開始から収束までを描こうとするもの。」(10頁)である。目次は以下の通り。

序章	ハワイ日系人戦時強制収容の包括的理解へ向けて
第一章	ハワイ日系人戦時強制収容「開始期」におけるサンドアイランド抑留所の再検討
第二章	ホノウリウリ抑留所開設による戦時強制収容「継続期」への移行—面会制度と日系人抑留者の生活
第三章	ホノウリウリ抑留所/収容所史の再考—「継続期」における日系人抑留者の「抵抗」から
第四章	戒厳令撤廃以後の日系人抑留者たちと戦時強制収容の「収束期」
補論	太平洋の中のホノウリウリ—戦時避難民の一時受け入れと移送
終章	ハワイ日系人戦時強制収容の歴史の変遷

本書は、オアフ島のホノルル港に隣接するサンドアイランド抑留所とオアフ島内陸部にあるホノウリウリ抑留所に注目して、ハワイにおける強制収容を「開始期」(1941年12月8日～1943年サンドアイランド抑留所閉鎖)、「継続期」(1943年ホノウリウリ抑留所開設～1944年10月24日の戒厳令撤廃)、「収束期」(戒厳令撤廃～1945年10月最後の抑留者釈放)の

3期に区分して論じている。第一章では、サンドアイランド抑留所の管理・運営及び抑留者の生活について、第二章では、ホノウリウリ抑留所の面会制度に焦点をあて、抑留者とその家族及び当局にとっての同制度の意義を分析している。第三章では、ホノウリウリ抑留所が戦争捕虜収容所としても使用されたことに触れ、日本人捕虜と日本人

抑留者の接触、また帰米二世(アメリカに生まれ、日本で教育を受けたのち、再度アメリカに戻った日系人)抑留者の存在について検証し、第四章では、これまでほとんど論じられることのなかった1944年10月の戒厳令撤廃後のホノウリウリ抑留所の状況について明らかにしている。補論では、1944年以降、日本統治下の「南洋群島」(現南洋諸島)からハワイに移送された在外日本人戦争避難民を、一時的に受け入れた連合軍捕虜収容所としての抑留所機能について論述している。

これまでの研究は、「開戦直後の緊迫した状況下での軍部による非人道的な管理ならびに苛酷な環境における抑留者の体験がクローズアップされ」、初期の抑留所の政策や抑留者の生活に焦点が当てられていたとして、筆者はサンドアイランドとホノウリウリの両抑留所の機能の変遷、またそれによる強制収容の意義そのものの変遷、そして両抑留所での抑留者の生活の実態を、新資料を豊富に活用して、詳細に論じている。その上で、日系人収容政策の終焉に関して、抑留所に最後に残されていたのは、これまでの研究で描かれてきた抑留所での日系人像とは異なり、強制収容に対する理不尽さや不当性を表明し、最終的に「ハワイの日系人コミュニティを捨てようとした抑留者」であったのではないかと述べている。さらに、強制収容の収束時期が明らかにされてこなかった背景には、当時のハワイの日系人の多くが、アメリカ本土から日系人抑留者が帰還したことにより強制収容が終了したとの認識をもったこと、「抑留所」(実際は捕虜収容所)に残されているのは市街地で軍関係の作業に従事させられた沖縄人戦争捕虜だと考えたことなどがあつたと推論している。

本書は、戦時の日系人強制収容政策におけるハワイという地域の歴史的地理的な特殊性、歴史研究における多角的多面的な検証や関係性・関連性への考察などの重要性を再認識させてくれる。また、これまで語られなかった収容体験が明らかにされ、それが、「知られざる苦難の経験から、コミュニティ全体が共有すべき過去」(20頁)になることは、ハワイ日系人の歴史をより多様で豊かなものとするだけでなく、多種多様な背景をもった人々の共生が世界的な課題となっている現代において、歴史から学ぶことの大切さを改めて認識する機会ともなるのではないだろうか。



1941年12月の太平洋戦争開戦を受けて、ハワイで行なわれた日系人戦時強制収容。抑留所の開設から撤廃までの期間(開始期)に始まり、収容生活が安定した「継続期」を経て、オアフ島に開設されたサンドアイランド抑留所。また、その後身となったホノウリウリ抑留所の「抑留所機能」がいかに変化したかを論じる。未だ包括的な研究が十分でない、ハワイの日系人強制収容史を、新資料を中心にその変遷と抑留所・収容所の変遷、抑留者、多様な資料を組み合わせて検証する。